

ハルシナイから上流の地名⑮

前回は掲載地図のアイヌトウラシナイ(anu-turasinay) an-nu-turasinay 我等よく登って行く・沢を紹介した。明治二十三年に調査した永田方正は、その目的は「鱒を捕りに登る川」としたので「鱒取川」と命名された。

他方、昭和三十五年、知里真志保は、この川から山越えして、雨竜郡の多度志へ行く交通路としての川であると伝承を記録した。

今回と次回は、掲載地図の石狩川左岸のアイヌの交通路と国道十二号の歴史を再度見ていきたい。安政四年(一八五七年)、アイヌの人たちが漕ぐ丸木舟で上流に向かった松浦武四郎は、アイヌトウラシナイから三丁上った(上流に向かって)右岸のルチシポコマナイ(cis-pok-oma-nay 峠・下・入って行く・沢)について、次のように書いた。

残念ながら、アイヌ語の意味には触れていない。

ルウチシホカマナイー右の方小川、急流。兩岸いよく高く岸は岩計なり。樹木陰森として実に異境の趣也。

明治二十三年に、掲載地図の旧国道を通り、調査した永田方正は、次のように記録した。

ルチシポコマナイ(rucis-pokom a-nay 嶺下川)川畔に古への峠あり、故に名く。橋畔に一水松あり、故に水松橋と名く。然れども此川は水松少なし。

また、ラルマニウシナイについては、次のように地名解をしている。

ラルマニウシナイ(rarmani-usinay 水松川)此川の沿岸水松多し、故に名く。嚮に多類摩橋、今は掬水橋と改む。

ラルマニ(rarmani)は、アララギ、別名イチイのこと。オンコ(水松)は方言。

当連載の②で紹介したが、丸木舟の通らない冬季は、アイヌの人たちは、掲載地図のペンケアソナイ(penke-asinay 川上の・柴木・多い・沢)↓公

式河川名・神居第二線川から、山越えして、石狩川上流へ往来していたのである。山越えの峠が、ルチシポコマナイの上流にあったのである。

安政五年(一八五八年)三月二日(陽曆四月十五日)に、松浦武四郎はアイヌの人たちの案内で、このマタル(mataru 冬・の道)を通り旭川の番屋に入った。

明治十九年六月二十四日に、樺戸集治監の囚徒によって竣工した上川仮新道(国道十二号の前身)は、このアイヌの人たちが利用し山道を活用した道路であった。明治二十一年九月二十二日、上川

巡察の第二代北海道長官の永山武四郎一行がこの山道を通った記事は、当連載の②で紹介したので参照いただきたい(インターネットで、旭川のアイヌ語地名研究で検索すると閲覧可能)。右の永山武四郎一行は馬行で、辺武計安曾内から山越えし、山頂に「距空知川十一里」の里程標があり、山径を下り達摩似(註)ラルマニウシナイのこと)に至った。

永山武四郎以前の二人の短い山道紀行も紹介しておこう。上川仮新道の開削を高畑利宜に命じた初代北海道長官の岩村通俊も、上川視察で、明治二十年十月十二日に、馬行でこの山道を通り、次のように簡潔に記した。

春志内、晚嶮備、弁慶備、達摩似等を過ぎ蘭野川橋を過ぎ

次は、明治二十一年七月三十一日、陸軍次官・桂中將一行が、屯田兵村設置の視察で、この山道を通る。これも馬行で、次のように伝えている。

神居古潭ヲ過ぎ字春志内川ヲ渡リ、右折シテ字ペンケアソナイノ嶮ヲ攀チ頂ニ至リ山背ヲ通過シテ行クコト約志里字タルマニ川ノ辺ニ下リ石狩河畔ニ出テ字イノ川ニ出ツ
これらの記録から想定したのが、掲載地図の……線のルートである。次回も、「春志内の大曲り」の国道十二号物語へと続く。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語地名研究

106

高橋 基

